



いとう



海援隊旗(二匁きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

## 龍 飛 RYOHI HOUBU 鳳 舞

## ここは館長の部屋 新年のご挨拶

新年、明けましておめでとございます。良き新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。新しい「龍」の年にあたりましての所感の一端をご紹介しますいただきます。

おかげさまをもちまして平成30年4月の施設の一新を経て、一級資料群の収蔵や研究と展示環境が整い、博物館や大学など関係者・機関とのネットワークや研究対象も拡充しました。現在こうしたソフト・ハード両面にわたる財産を活かし得る、本年4月からの一群の企画展を計画中です。

龍馬は幕藩体制の限界を悟り、混迷する幕末の難局を打開しました。次期の計画ではこのような龍馬の功績を巡る周到な計略の積み上げや、幕末の史実がその後の社会にどのような影響を及ぼしたのかなど、歴史の内幕とその魅力をより体系的に紹介するための研究と展示に取り組みたいと考えています。

このため、企画展示室では新たな「分野」や「重要人物」をテーマとする特別展を開催することをはじめ、好評をいただいている常設展示室では展示の更新によるバージョンプを計画しています。

また、サービスの魅力アップに向けましては、学芸員による展示解説や図録の発刊、講演会の開催や講師の派遣といったメニューに加えて、期間限定のセレクション展、展示の見どころのWEB配信や、イヤホン・ガイド、歴史&体験学習イベントの実施といったメニューの拡充を企画しています。

龍馬精神の伝播にあたっては、こうした方向性も持ちながら、子どもから大人までの幅広い層に向けた「龍馬館」らしい企画



画を主催し、龍馬顕彰施設としての磨き上げと、来館者の満足度の向上や、龍馬ファンの方のすそ野の拡大にもつながりますので、本年もお引き立てのほど何とぞよろしく願います。

吉村大

# 「錦絵にみる幕末維新」展

— 絵師と庶民の徳川幕府 —

錦絵と聞いて、みなさんはどのようなものを思い浮かべるでしょうか。錦という文字通り、美しいもの、色鮮やかなものなどを想像する一方で、浮世絵との違いはどこにあるのかと不思議に思った方も、もしかするといらつしやるかもしれません。当館で錦絵を中心とした展示を行うのはおよそ十年ぶり。本展では錦絵の多様な魅力を最大限に生かし、雅でかつ奥深い錦絵の世界を展開します。

錦絵は江戸時代に大衆文化として流行した浮世絵から派生したものであり、浮世絵版画の歴史は墨色の墨摺りから始まりまし。ここから、丹絵、紅絵、漆絵と移り変わっていく中で、江戸時代中期の明和2(1765)年に大小暦という絵を伴う略暦の交換会が流行します。この際に、美麗さや意匠の工夫が競い合われ、多色摺りの木版画として錦絵が生み出されました。さて、錦絵の種類は多様であり、女性を描く「美人画」や、歌舞伎の役者や有名人を描く「役者絵」などがあります。また、「絵双六」と呼ばれるすごろくも存在し、い

わゆる娯楽品や土産品として庶民から武家に至るまで幅広い層に親しまれました。その一方で、江戸時代後期になると、ユーモアや駄洒落を描いた「戯画」や巧みな技法を用いて世情を風刺する「見立て絵」(諷刺錦絵)と呼ばれるものが流行するようになります。これは、歌川国芳以降格段に広まり、特に戊辰戦争期には数多くの作品が生み出されました。

戯画や風刺的要素の強い錦絵一つ一つには実に巧みな工夫が凝らされており、絵師からの暗号を読み解くことで初めてそこに描かれているものを理解することができます。諷刺錦絵はいわば絵師からの挑戦状であり、人々は持つている知識を活かして解説に努めます。一見すると、子供が仲良く遊んでいる様子や店で宴会が開かれている様子、或いは野菜と魚が槍などを持ち二手に分かれて戦っている様子にしかとらえられないものも、すべて歴史上のある出来事を詳細に描いたものだったので、制作者や受け取り側の想いが強く反映されたものもあ

り、一つの作品から様々なことを読み取ることが出来ます。本展ではこのような色彩、内容ともに彩色に富んだ錦絵について、情報と風刺をテーマに幕末維新期のもを取り上げ、絵師と庶民の視点から幕末維新期を四章立てで紹介します。幕末期にはどのようなメディアが存在したのか、時代の変わり目に直面した絵師と庶民は戊辰戦争や幕末期自体をどのように捉えていたのかなど、展示を通して是非考えていただく機会になればと思います。

上村香乃



当世長つ尻な客しん(個人蔵)



青物魚軍勢大合戦之図(当館蔵)

令和6(2024)年 1月20日(土)〜4月7日(日) 会期中無休  
・講演会 3月9日(土)13時半〜15時  
講師 大石学(東京学芸大学名誉教授 演題「戊辰戦争と情報社会」)  
・展示解説(西日ともに11時〜 30分程度)  
①2月10日(土) ②3月9日(土)

# 「龍馬の真髓 - 龍馬は何者? Who is Ryoma? -」展を振り返って

坂本龍馬は、日本史の中で最も有名な人物の一人でありながら、何をした人かという点、非常に分かりにくい。多くの方は、龍馬が薩長同盟や大政奉還に尽力したことをご存じだと思いが、どういう役割を担っていて、どのような功績があったのか、ということまで理解している方は少ないだろう。研究者の間でも、龍馬の功績については、高く評価する人と、大きな功績は無かったと考える人がいて、見解が分かれている。

このように龍馬が理解されにくい一番の要因は、明確な資料が少ないためだと考える。龍馬の資料は、龍馬が書いた手紙がほぼ全てである。龍馬宛ての手紙はほとんど残っており、藩の公式資料にもほとんど登場しない。意見書や自分の考えを記した日記も残っていない。

龍馬はテレビや小説などの影響で、英雄のように捉えられることも多いが、実際には、影の功労者という立ち位置である。薩長同盟や大政奉還における龍馬の役

割は、戦略家であり、調整役・交渉役だといえる。表舞台で主役となつて活躍する英雄とは違って、主役となる人の影で動いている。同時代の人からの評価は極めて高いものの、公式記録に登場しなため、後世の人からすれば、どのような発言をし、どのような功績があったのか、正確に理解するのは難しい。

本展では、こうした分かりにくい龍馬の功績は勿論、志や人柄、個性などの特徴を紹介し、龍馬の真髓に迫ることとした。

さらに、当館では昨年度、新たに7点の龍馬真筆の書簡を収蔵することとなり、これまで収蔵していた7点と合わせて14点の収蔵点数となった。本展は、その新収蔵資料のお披露目を兼ねた展示でもあった。

## 龍馬の特徴

龍馬がどういう人物なのかを知るために欠かせない手紙はいくつかあり、本展でも様々な手紙を展示した。ここではパネルで紹介したもの、資料展示はできなかった手紙を一つ紹介したい。

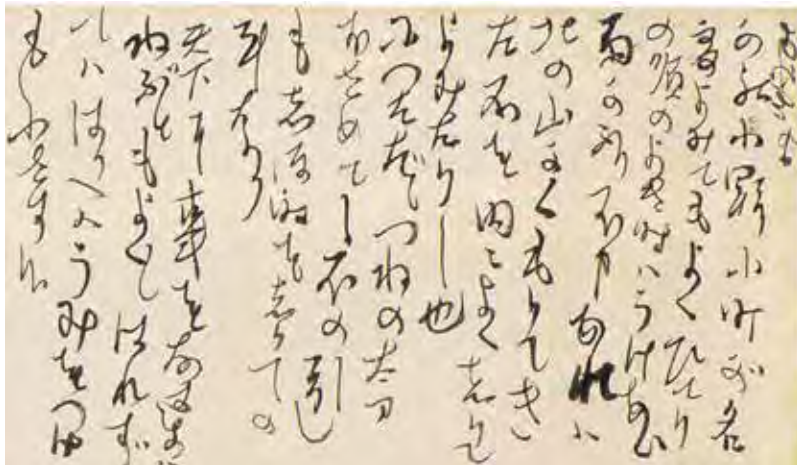
元治元(1864)年6月28日 姉・乙女宛の手紙で、龍馬の人生哲学が表れた興味深い手紙である。

「かの小野小町が名哥(歌)よみても、よくひで(日照)りの順のよき時(うけあい)(請合)、雨がふり不(し)申。あれ(北)の山(が)くもりてきた所を、内々よくしりてよみたりし也。に(ただ)つね(新田)義貞(潮)の引しも、しほ時をしりての事なり。天下に事をなすもの(ハ)ねぶともよく(は)腫(れ)すて(ハ)、はり(針)へ(う)み(膿)をつけも(さ)ず候。」

小野小町や新田義貞の逸話は、未来を予知していたかのような二人の言動に対して、周囲の人が驚く逸話である。しかし、龍馬に言わせれば「何も驚くことはない」そうだ。「情報収集をして、機会を見極めて行動を起こしたのだから、成功するのは当然」ということなのだろう。龍馬の人生哲学がよく分かる話である。

薩長同盟や大政奉還など、非常に難しい事業を成功に導いた龍馬は、常に先を見据えて情報を集め、策を練つて事に臨む人である。写真から受ける印象は、大から大雑把そうな人であるが、実際はかなり細かい人物なのだ分かる。

三浦夏樹



元治元(1864)年6月28日姉・乙女宛(複製・部分)原資料は高知県立高知城歴史博物館所蔵

# りょうま館の開館記念週間イベント

11月15日は坂本龍馬の誕生日であり、当館の開館記念日でもあります。毎年この日は無料開館を実施しておりますが、昨年は開館記念週間イベントも開催しました。ほかにも「龍馬まつり in 記念館」や、高知県立歴史民俗資料館と連携した「長宗我部フェス in 浦戸」など、11月はイベントが目白押しでした。今回もいくつかピックアップしてご紹介いたします。

11月12日の「龍馬まつり in 記念館」は、桂浜と連携したイベントです。桂浜ではよさこい踊りやクイズ大会などもあり、当館も龍馬にちなんだ〇×クイズを行いました。記念館では「なりきり龍馬撮影会」や缶バッジづくり、オリジナルの紙芝居の読み聞かせを実施しました。紙芝居「海援隊物語」は、海援隊の成り立ちや、龍馬の活躍などを紹介しています。当日はご家族で参加された方が多く、短い時間でしたが熱心に聞いていただいております。

11月15日は、無料開館に加えて、記念品のオリジナル小皿をプレゼントしました。当館は開館32周年を迎えましたので、先着320名様へのプレゼントとさせていただきます。読者のなかにもゲットしてくださった方もいらっしゃるかもしれません。よろしければ是非、SNS等で使っている様子を見せていただけたら嬉しく思います。



龍馬まつり 紙芝居



長宗我部鉄砲隊

11月19日は「長宗我部フェス in 浦戸」です。土佐長宗我部鉄砲隊と、豊後大友宗麟鉄砲隊の演武を披露いただきました。海にむけて行う火縄銃の発砲実演は「ドン！」と大きな音が響き、長宗我部フェス in 浦戸の開幕にふさわしい、圧巻の演武でした。豊後大友宗麟鉄砲隊の皆様は、大分県から船で遠路はるばるお越しいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

館内では甲冑の着用体験を行いました。事前予約はすぐに埋まってしまったため、急遽時間を延長して開催したところ、昼過ぎまで列が途切れない人気ぶりでした。皆さまごく楽しそうに記念撮影されている様子がとても印象的でした。



甲冑体験

開館記念週間イベントは11月26日まで開催し、学芸員による常設展の展示解説や、缶バッジづくりなど、土日は特に盛況でした。

2023年は、展示とはまた違った面でも当館を楽しんでいただけたらという思いで、イベントをたくさん実施した1年でした。2024年は「龍馬館のお正月」と題し、元旦からお正月イベントを開催します。また、1月20日(土)からは、「錦絵にみる幕末維新－絵師と庶民の徳川幕府－」展もはじまります。今年も皆さまにお会いできることを楽しみにしております。

竹田 綾

# 龍馬の手紙

21

## 大政奉還に

## 尽力する手紙

(慶応3年10月13日 後藤象二郎宛)

『竜馬がゆく』を読んで、高校3年生の夏休みに、大分県の臼杵港からフェリーに乗り、原付でひとり、高知の歴史旅をした私にとって、坂本龍馬は特別な存在である。旅行時には、まさか自分が高知県で働くことになるとはいざ知らず、「竜馬熱」に罹り、歴史に関する仕事をしたいと考えたのが、もう20年近くも前となった。

以来、「竜馬ファン」ではあるが、龍馬の手紙をしっかりと読んだことはなかった。今回、140通を超える龍馬の手紙にざっと目を通して、関心を惹かれたのが、二条城で大政奉還の説明(可否諮問等)を受ける後藤象二郎に、龍馬が発破をかけた手紙である。

一番目を引く龍馬の言いまわしは、「先

生二地下二御面会仕候」。先生は後藤であり、地下はあの世。大政奉還が失敗したら、後藤は責任をとってその場で腹を切るであろうから、龍馬は海援隊とともに將軍徳川慶喜を襲撃し、あの世で後藤に面会すると書いている。龍馬や後藤が、必死の覚悟で大政奉還に臨んでいたことが分かる手紙である。周知のとおり、幕末土佐藩の集大成である大政奉還建白は実り、龍馬と後藤は地下で面会せずに済んだが、その一ヶ月後に龍馬は暗殺されてしまう。

一方、龍馬も尽力した大政奉還建白には、二院制の議會構想や議員の選挙について記されている。加えて、その後の高知は、国会開設を求めた自由民権運動のメッカとなる。龍馬ら幕末志士の運動が、自由民権運動に繋がるかは検討の余地があるが、民権家たちが龍馬を自身らの源流と位置付けたことは事実である。

先日の選挙において、またまた過去最低の投票率が更新されたと見聞した。「公論」が政治に反映されることを「必死の覚悟」で目指した龍馬や民権家は、この現状をどう想うのであろうかと考えさせられた手紙である。

高木翔太

(高知県立高知城歴史博物館 学芸員)

## Q&A

No.6

当館や高知観光などについて日常寄せられるさまざまな質問と、その答えを職員がリレーでご紹介します。

Q. 展示室が暗いと思うのですが?

A. はい。このような理由があります。

「もう少し展示室は明るいほうがいいと思うのですが」とお声がけをいただくことがあります。確かに、展示室は少々暗め、空気も季節によってはヒンヤリ感じることもあると思います。実はそれは大切な資料、展示物を守るためなのです。

展示室の明るさは直射日光が入るような明るすぎる場所を避け、紫外線や赤外線も少ない照明を使用しています。温度は通年22度~23度、湿度は55%を維持しています。展示室には歴史的にも大切な資料があり、次の世代に残していかなければなりません。できるだけ「劣化を最小限に防ぐ」ための方法のひとつとして照明が暗めなのです。

実は他にも、お客様に入口受付でご協力をお願いしていることがあります。

例えば、食べ歩きなどはもちろんご遠慮いただいておりますが、飲み物なども害虫誘引やカビの発生、資料への汚損を防ぐために、ペットボトル・水筒はしっかり蓋を閉めて決められた場所以外では手荷物にしまってお見学いただ

くこと。他にも、長い傘や濡れた傘などのお持ち込みは、水濡れによるカビ発生や、展示物や他のお客様への接触事故防止のため入口にお預けいただくこと。などのご協力をお願いしています。

皆様にはご不便をおかけすることもございますが、どうぞご協力、ご理解いただいでじっくり展示をご覧いただきたいと思ひます。

谷本 弥生





「唐美人図」(当館蔵)



「東方朔」(当館蔵)

まず、左の二点の絵画ををご覧ください。全く異なる雰囲気だと思いませんか？一点は細い線で精緻に描かれ、色々な色が使われています。一方は大らかな筆致で描かれ、色彩は押さえられています。色ゆったりとした雰囲気がありますが、対照的ともいえる二点ですが、どちらも作者は河田小龍です。

小龍は狩野派、南画など様々な流派の技術を身につけ、軸や卷子はもちろん、絵金風の芝居絵屏風、絵馬、幟といった土佐の生活に根付いた制作も行っています。維新後は高知県庁(一)で内国勸業博覧会の仕事をしたり、高知初の印刷地図の原図を描いたり…とまさに多種多様な仕事をしています。絵だけではなく、漢詩も得意。まさにマルチ・アーティスト。

しかし、小龍の真骨頂は、観察と写生、いわば、眼前のものを写し取る技術に長けた絵師といえるのではないかと考えます。

その好例が『漂異紀略』ですが、その他の一例として、小龍が描いたトカゲの作品を紹介します。安政元年9月22日に玄森山(黒森山か?)で尾が二つあるトカゲを捕まえた者が、日がたつて朽ち果てていくことを懸念し、その記録を残すため、小龍に絵を描いてもらうことにした、と作品には書かれています。

また、安政元年、土佐藩士らが薩摩藩の反射炉の視察に出張した際は、小龍も藩命で図取り係として同行しています。写真係のような役割でしょうか。

明治になってからも、北垣国道京都府知事(高知県五代目知事)の招きで京都に行き、琵琶湖から京都に水をひく「琵琶湖疎水工事」の記録画も制作しています。

これらのことから、小龍は実際にあるものを描くことに長けた絵師として知られていたことがわかります。

もうひとつ、小龍を考えるときに注目したいのは、当時の画人達との交流や師弟関係は当然のこと、吉田東洋との関係、志士たちとの交流、行政との関係など非常に幅広い人脈です。こうした交友関係が、小龍の画業にどう影響しているのかも興味深いところです。

書画作品そのものを「色がきれいな」構図が面白い」と鑑賞することも楽しみ方のひとつですが、「この作品が描かれたのは何故なのか？誰の依頼なのか？」「なぜ、この画題なのか？」「賛は誰か？」等、深読みすることも楽しみ方の一つです。絵は「見るもの」ですが、同時に「読み取るもの」とも言えます。描かれた時代や作者についての色々な情報や知識があると、より深く楽しむことができるのは、絵画だけでなく歴史資料も同じではないでしょうか。

「えー、年号とか覚えるの嫌だなー」と思う方もおられるでしょうが、興味を持ったものだと、それも苦にならないのでは。まず、作品や資料に興味を持つただけるような展示の工夫や普及事業は私たち学芸員の仕事。新館がオープンして約5年。これからは、そうした展示演出にも知恵を絞りたいと思います。

来年は河田小龍生誕200年にあたります。当館と、県立美術館、県立歴史民俗資料館の3館が初めて連携した、小龍の特別展示を行います。2003年の県立美術館での「河田小龍―幕末土佐のハイカラ画人」から20年、前回を超える大展覧会、各館で鋭意準備中です。どうぞお楽しみに！

## ミュージアムショップ便り

本館出口に位置するミュージアムショップでは、龍馬に関する様々なグッズを始め、年間を通して開催される講演会や、企画展関連の商品を揃えて、皆さまの来館をお待ちしております。

今回は、数ある商品の中から、当館オリジナルの“超定番商品”と“新商品”をご紹介します。

### 超定番商品 「坂本龍馬記念館オリジナル 記念メダル」

この機械を目にしたほとんどの方が、笑顔と共に「懐かしい〜!」という言葉を発してくださいます。それぞれの方が、今までに訪れた旅先での思い出を一瞬にして振り返られている様子は、こちらの方まで笑顔にしてくれます。

当館のオリジナルメダルの色は、ゴールドとシルバーの2色。デザインは、表面に坂本龍馬の立位像、裏面には坂本家の家紋と当館名が刻まれています。また、併設する刻印機(1回30円税込)での日付や名前等の刻印、オプショングッズ(各200円税込)を加えてネックレスやキーホルダーとして使用いただくなど、更にオリジナル感を加える事も可能です。

最近では「ゴルフのマーカ一代わりに最適!」と、購入くださる方も増えてきました。

当館にお越しの際には、形に刻む旅の思い出の1つとして、自分だけの「オリジナル記念メダル」はいかがでしょう。



記念メダル販売機



価格500円(税込)

### 新商品 「龍馬のしおり」

高知県は、森林率全国1位を誇る自然豊かな県です。当館でも、この誇らしい資源である県産木材を用いた商品をいくつか販売していますが、中でも1番のニューフェイスが「龍馬のしおり」です。

県産のヒノキを素材とするこの商品は、縦120mm×横25mmと、単行本にも利用いただける手頃なサイズ。表面には、龍馬の詠んだ歌にある有名な一節と坂本家の家紋、「龍馬」の自署がデザインされています。

屋内で過ごす時間も多くなるこの季節。木の暖かさと、ほんのりヒノキの香る「龍馬のしおり」を傍らに、ゆったりとした読書タイムを是非お楽しみください。



価格700円(税込)

※上記掲載内容は2023年12月末時点での情報に基づいて作成しております。 野村 瑞穂

## ■「海見える・ぎやうらい」

当館では年に4回の企画展を新館の企画展示室で開催しています。坂本龍馬に関することや幕末の様々な出来事をテーマにとりあげて、様々な資料で紹介しています。2, 3か月ごとに企画展を行いますので、「あ、もう終わっていた…」ということもある方もおられるかもしれません。

貴重な本物の資料のほか、詳しい説明パネルも添えて、理解を深めていただくようにしています(なので、ぜひ、パネルも読んでください)。このパネルを読んでいくだけでも、「なるほど」と思えることがたくさんあり、終わった後に廃棄するのはもったいないな…ということから始まったのが、本館「海見える・ぎやうらい」での「TO BE CONTINUE展」です。これは、企画展で展示していたパネルから、いくつか選んで、抜粋展示を行い、すでに終わった展示ですが、そのエッセンスを味わっていただくというものです。

現在は、10月1日に終了した特別展「花と歴史の爛漫土佐」第2部「月と龍馬の桂浜一坂本龍馬像物語」から解説パネルのほか、桂浜の坂本龍馬像の概要や龍馬像建立の発足から除幕式までの日誌の抜粋を紹介するパネルを展示した「坂本龍馬像物語AGAIN」を開催しています。その他、龍馬像建立までを記録した記念アルバムの写真(データをプリントアウトしたもの)もご紹介しています。(1月中旬までの予定)

企画展の主役はもちろん、本物の“資料”であり、その資料に何を語ってもらい、どう見せる(魅せる)か、は学芸員の腕の見せ所です。その一方で、企画展の趣旨や面白さ、展示資料の魅力に限られた字数やスペースで伝えるか、という技も求められるのがパネルです。そうした学芸員の苦勞の結晶である「パネル」の「第2の人生(パネル生?)」ともいえる、海見える・ぎやうらいでの「TO BE CONTINUE展」をお楽しみください。



河村 章代

### 入館状況

2023年12月20日現在

(1991年11月15日開館以来 32年36日)

◆入館者数 4,614,652人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 677,892人

### 編集後記

新しい年を迎えました。本年は辰年、龍馬の「龍」の年です。大空を舞う龍のように、皆さまも当館も、大きく飛躍できる年になりますように。

本年度最後の企画展は、「錦絵にみる幕末維新一絵師と庶民の徳川幕府一」展。美人画や風景画など、美術品として広く一般にも好まれる錦絵ですが、幕末の錦絵は少し様相が異なります。詳しくは展示が始まってからのお楽しみ。1月20日から4月7日までの開催で、期間中は記念講演会や展示解説も予定しております。どうぞお楽しみに(か)。

館だより「飛騰」第128号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏  
 〒781-0262 高知市浦戸城山830  
 発行日 2024(令和6)年1月1日 TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015  
 発行 公益財団法人高知県文化財団 http://www.ryoma-kinenkan.jp  
 高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休  
 入館料 一般500円(企画展開催時700円)  
 高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。  
 〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで